ＥＮＤ―ＯＦ―ＬＩＦＥ　ＣＡＲＥ～患者・家族の意思と病院の役割～

(主旨)

終末期医療のシンポジウムに取り組むに当たり、今回留意した点は以下の３点である。１つは、終末期医療という言葉である。まさにこの言葉通りであっても、どうしてもこの言葉にはグルーミーな空気が漂う。従って、今年は、新しい名称にしてみた。この名称はいかがであろうか。２つ目は終末期医療における病院の役割である。施設、在宅での看取りが声高に叫ばれる割には、未だスポット的であり、大きな流れにはなっていないように思える。私見ではあるが、在宅医療や看護等の支援の下で在宅での看取りを望んでも、未だ社会的、経済的に困難が山積していること、在宅医療を進める過程で、病院の役割が改めて見直されているのではないだろうか、と考えたりしている．３つ目は、終末期医療では特に、提供側（医療側）と利用者側（患者・家族側）の認識，意思を共通にすることが求められる。当初、シンポジストの一人に患者ご家族も考慮したが、諸般の理由で断念した。

そんな中、このたび、日慢協の参与になられた岡田玲一郎先生（社会医療研究所）よりメールをいただいた。先生のご提案は「今は、終末期医療は医療関係者のみで議論していく時代ではなく、少なくとも、このシンポジウムを市民公開にしてはいかがでしょうか」というものであった。私も、これは素晴らしいご提案であると考え、シンポジウム③「認知症患者の人権と尊厳～どう守られているか~」の座長をされる松谷之義先生のご賛同も得て、学会第１日目の午後の特別会議室での２つのシンポジウムは市民公開にさせていただいた。活発な議論が展開されることを心から期待している。

＊座長：中川翼（日本慢性期医療協会副会長　定山渓病院院長）

＊シンポジスト：(お一人１５分)
講演①　湧波敦子（北中城若松病院理事長）
講演②　平田　済（たたらリハビリテーション病院院長）
講演③　山田智子（光風園病院看護科長）
講演④　蛸島八重子（北海道医療センター内、北海道難病ネットワーク連絡協議会・難病医療専門員・看護師）

＊シンポジウム（３０分）：シンポジスト上記の４名